

# 六花

RIKIWA

2

俳句雑誌りつか  
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno



こん  
今

古希正月

山田六甲

日の峰といふは佳き地ぞ大旦  
恵比寿顔大黒顔の初湯かな  
二日かな万年筆の尻ぬぐひ  
猪日かな古希正月を祝ぎて  
ビキユーナのベストがベストお正月  
とりわける爪美しき節料理  
葉牡丹のいよいよ渦をつよめけり  
初荷かな宅配便の人走り  
するすると尾の吸ひこまる嫁が君  
寒卵茹でてまともに剥かれざる  
大とんど雨の向うに城の跡  
石垣に立てかけで売る大根かな  
湯の町に猫一匹や松の明け  
出刃を研ぐ寒九の水に浄めては  
万能茶啜りて寒を籠もりゐる

千人代官で祝う猪の串カツも出て  
ベストを贈ってくれる

指につく佛の御飯寒の内  
蓬萊といふ字とびゆくどんどかな  
水玉が包む帰りの近き鴨  
水玉に鴨の羽ばたきみたりけり  
厳しくも気高き若狭の冬怒濤  
寒も明け近くなりたる土の湯気  
牡蠣焼いて殻の怒りを買ひにけり  
冬草に山羊の蹄のしづみけり  
臘梅の匂ひを包む小雨かな  
錆びてゐるトタンの店に掛け大根  
石垣を借りて大根売りゐたる  
白息の犬はち合せしてをりぬ  
初春や浮子や錘や飾りとし  
寒月の円くならむとしてゐたり  
立春の音たてて来るポストかな

珊瑚樹の実を垂れ母の忌日かな  
一冊の母の句集や田鶴たづ来る  
桐の実を拾へば背より父の声  
神官の袴つかまれ七五三  
昨日より少し巻き上ぐ秋簾  
稲架襖あをき匂ひを放ちけり  
口で吹く蒲の穂絮の湧きいづる  
鯰はねて光まつすぐ立ちにけり  
四阿に音を違たがへて降る木の実  
境内の枝伐つてあり秋祭

# 九十の師を抱きしむる秋の暮

田尻 勝子

きゆうじゅうのしをだきしむるあきのくれ たじりかつこ

空中を抱きしめてみる寒の闇

九十の師を抱きしむる秋の暮

海峡の冬日ひとつを抱いてゐる

ピアノの目配せ秋の曲始む

楽堂を逃げた音符の紅葉す

偶然出会った秋の夕暮れ、九十歳の恩師を抱きしめる。これだけで充分。作者の来し方、恩師の来し方、思い出、何もかも含めて、万感の思いで恩師を抱きしめる。じっくりと味わった文字の最少記録。六甲

# 雪卿集

枯  
葉

永田万年青

川涸れて黒き流木現はれり  
白鳥の首を伸ばして草を食む  
ペンションの重なる落葉踏み入る  
足裏に枯葉を付けて外湯かな  
高波の間あわいにかすか渡り鳥

枯  
蓮

升田ヤス子

紅茸の小さきが生ひぬ去来庵  
水澄める流人の川よ家の裏  
嵯峨野かな細き添水の大き音  
枯蓮ぷつぷつ魚の息聞こゆ  
枯蓮みづから風を立てにけり

# 雪卿集

友の個展

市川伊團次

雷鳴や友の個展は終ひけり  
電話にて妻満月を語り合ふ  
月明かり海より窓に須磨の風  
ジオトープ目立たぬやうに柳散る  
雄ひじわのあるがままにて枯れてをり

竹落葉

松本文一郎

足裏にやさしくありぬ竹落葉  
餌につられ易く崩るる鴨の陣  
鴨一声藪へ逃げ込む小鳥どち  
田の神へ御酒を注ぎて秋収  
秋寒や頭を隠し二番寝す

# 雪樹集

烏  
瓜  
住田千代子

ここに來て落葉落ち着く高瀬川  
一枚のあまりも長き秋簾  
去來墓前に盜人萩の実と參る  
斑なる柿の落葉を拾ひけり  
揺るるまま手に渡りをり烏瓜

蚊遣豚  
赤松有馬守破天龍正義

林檎だけ残して戻る弁当箱  
出店して隠してをりぬ新松子  
椎の実をかじるをみな真顔かな  
蚊遣豚汀みぎわに置きぬ高瀬川  
小春かな個展を開く風雅人

# 蛩雪譚

六甲選

※平凡な一日にも朝昼晩がある。

二十七年二月号鑑賞

一冊の母の句集や田鶴来る

政子の故郷は山口県。東部に位置する周南市の八代盆地はナベヅルの渡来地。母上（藤本恵美子さん）の出した句集は「今年竹」一冊のみ。しかし娘はたった一冊の句集を開く度に母の声聞こえてくる思いなのだ。母の忌日と鶴の飛来とは同じ時期。その頃になると、その句集を取り出して鶴の声と母の声を聞くのである。一冊であつても句集の存在は大きい。

桐の実を拾へば背より父の声

政子によればお父上はご養子のせいもあつてかとても優しくかつたという。桐の実を拾うときふとお父上の声が聞こえてきたような気がした。「これが大きくなつたら、お前の嫁入り箆筒にするんだよ」と桐の実を埋めた時の事がはつきりと蘇つてきたのだ。男の子には杉の木を植え、女の子には桐の木を植える。子どもが成人する頃には桐の木は箆筒に、杉の木は家になる。昔はそうしていた。以上二句は褻の句だが霽れとしても通用する。これからは褻と霽の句の使い分けも自在に詠めるようになってくるであろう。内容は褻でも文芸として公に通じる作品も可能だ。

※褻と霽について、ケ（褻）はふだんの生活個人や仲間内で通じること、ハレ（晴、霽）は儀礼や祭、年中行事などの「非日常」などの公のこと。（編集部）

昨日より少し巻き上ぐ秋簾

太陽の暑さが簾を巻き上げた分凌ぎやすくなったというのだ。簾の役目も終わりに近い。暑いねえ、寒いねえ、の挨拶は前日に比べての気温の変化を言っているのだ、と宇多喜代子がサル会のシンポジウムで話していた。とても印象深い話だったので、今でもそう思っている。この句は秋になっての涼しさを簾の巻き上げる分量で示している。簾のアナログ式寒暖計。

六花集

二月号

平居 滯子

稲架 襖 八海山の影届く  
鹿垣の山頂にまで及びけり  
星月夜寄り添ひゐたる影法師  
胸底に水の流れて夜の長し  
散骨を記憶する掌や秋灯

秋田 典子

交差する電車が消しぬ虫の声  
村祭警笛鳴らし電車過ぐ  
天狗来て親に抱きつく秋祭  
秋祭回しの色に年季あり  
秋祭終へて回しの日干しかな

小林はじめ

湯豆腐の奉行のしぐさ見ていたる  
六つの花朝日を受けて輝ける  
鍋物の砥部の蓋開く奉行かな  
柚子の香の充てる湯殿に至福かな  
短日の一本松の地に置かれ

菊谷 潔

面白き年もはや瀬となりにつけり  
初夢の覚めてわらしべ手の中に  
虚空より虚空におちる紅葉かな  
椎の枝風鳴らしけり冬に入る  
霜解けの水を末期の紅葉かな

大内 幸子

里柿に守られてゐる五輪仏  
秋天を動かしてゐる大クレイン  
今日からはひとりの部屋に初炬燵  
祭壇をつつむ陽差しや白障子  
雪蛸となりてよぎりし庭先へ